

[学術論文]

## 現代アメリカにおける移民研究の新動向（下）

——移民第二世代の同化をめぐるポルテスの研究を中心に——

The Assimilation of the Second Generation of New Immigrants in the United States

村 井 忠 政

Tadamasa MURAI

---

*Studies in Humanities and Cultures*

---

No. 6

名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』抜刷 6号  
2006年12月

GRADUATE SCHOOL OF HUMANITIES AND SOCIAL SCIENCES

NAGOYA CITY UNIVERSITY  
NAGOYA JAPAN  
DECEMBER 2006

[学術論文]

## 現代アメリカにおける移民研究の新動向（下）

——移民第二世代の同化をめぐるポルテスの研究を中心に——

村 井 忠 政

**要旨** 1965年のアメリカ合衆国の移民法改正は、それ以前の人種差別的移民制限法の下で保たれてきていたエスニック集団間の均衡を突き崩すという結果をもたらした。65年移民法体制の下、1970年代の合衆国は合法移民、「不法」移民、そして難民を合わせて恐らくは毎年100万を越えると推定される新しい移民の波に見舞われ、ラテンアメリカからのヒスパニックや従来ほとんど認められていなかったアジア系移民の激増を見ることとなったからである。1970年代以降、20世紀初頭の第一の移民の大波に次ぐ第二の大量移民時代にアメリカ合衆国が突入したことを受けて、アメリカの移民研究は現在新しい段階に入っている。

本稿では、現代アメリカ合衆国のラテンアメリカとアジアからの「新移民」の同化をめぐる社会学的実証研究に精力的に取り組み、目覚しい成果を挙げているキューバ系アメリカ人社会学者アレハンドロ・ポルテスに着目し、彼の移民の同化をめぐる議論に焦点を当てることにする。本稿のねらいは、①アメリカ合衆国における20世紀初頭の新移民と現代の「新移民」の比較考察をすることで、現代の「新移民」の同化が持つ多様性、独自性を明らかにすること、②さらに、これら「新移民」の第二世代に当たる子どもたちが、現代アメリカ社会に適応し、社会経済的地位を向上させていくためには、いかなる条件が必要とされるかを明らかにすることにある。

**キーワード**：アレハンドロ・ポルテス 「新移民」 分節化された同化 文化変容の型  
移民第二世代

### はじめに

アメリカといえば「移民によって創られた国」あるいは「故国での迫害から逃れてきた人々に門戸を開き受け入れてきた国」というイメージが一般的になっているとはいえ、アメリカ合衆国がその門戸を常にあらゆる人種や民族に向かって寛容に開いてきたわけでもなければ、無条件に受け入れてきたわけでもない。特に20世紀初頭の空前の規模の移民の到来（本稿ではこれを移民

の「第一の大波」と呼ぶ) に対して、アングロサクソン系アメリカ人を中心とする「ネイティヴィズム (Nativism)」と呼ばれる先住国民の非妥協的な移民排斥論が起こり、1920年代の移民制限法をもたらすことになる。合衆国がこのきわめて人種主義的な移民制限策を脱するのには、40年後の1965年を待たなければならなかった。

しかし、この法は従来人種差別的移民制限法の下で保たれてきていたエスニック集団間の均衡を突き崩す結果をもたらした。65年移民法体制の下、1970年代の合衆国は合法移民、「不法」移民、そして難民を合わせて恐らくは毎年100万を超えると推定される新しい移民の波に見舞われ、ヒスパニックや従来ほとんど認められていなかったアジア系移民の激増を見ることとなったからである(本稿ではこれを移民の「第二の大波」と呼ぶことにする)。

1970年代以降、第二の大量移民時代にアメリカ合衆国が突入したことを受けて、アメリカの移民研究は現在新しい段階に入っていると言える。この新しい移民研究の時代は1970年代から始まり、80年代に拡大し、90年代に爆発的な勢いで広まり現在に至っている(Foner, Rumbaut, and Gold 2000 : 3)。

アメリカにおける移民研究者の第一世代は20世紀初頭の東欧・南欧からの新移民の研究に取り組んだロバート・パークらに代表される初期シカゴ学派と呼ばれるシカゴ大学の社会学者たちである。彼らの研究の焦点は、新移民に対する差別や移民が都市に与える影響(例えばインナーシティにおけるスラムやゲットーの形成)の問題に当てられた。移民研究者の第二世代は大恐慌期から1960年代までの20世紀半ばの40年間に及ぶ移民中断期の移民研究に取り組んでおり、そこでの移民研究の焦点は移民の第二世代と第三世代の同化の問題に、第二次大戦後は人種・民族関係をめぐる争点に焦点が当てられた。さらに、かつてのアメリカ移民研究が、もっぱらヨーロッパからの移民に焦点を当てていたのに対して、現代の移民研究ではラテンアメリカとアジアからの移民に焦点が当てられることが圧倒的に多くなり、ヒスパニックやアジア系の移民を研究する者はますますその数を増してきている(Ibid. : 5)。その結果、近年ラテンアメリカやアジアからの移民の第二世代や第三世代の中から移民研究者が輩出してきている。このような意味で、本稿で取り上げるキューバ生まれのアレハンドロ・ポルテスが、1998年にラテンアメリカ出身の社会学者としてははじめて、アメリカ社会学会(ASA)の会長に就任したことは象徴的な出来事であったと言えよう(Ibid. : 23)。いまや移民研究は狭い意味での移民研究の枠を超えて、現代アメリカ社会一般の問題になっていると言っても過言ではない。

本稿では、現代アメリカ合衆国のラテンアメリカとアジアからの「新移民」の同化をめぐる社会学的実証研究に精力的に取り組む、これまでに目覚ましい成果を挙げているキューバ系アメリカ人社会学者アレハンドロ・ポルテスに着目し、彼の移民の同化をめぐる議論に焦点を当てることにする。本稿のねらいは、①アメリカ合衆国における20世紀初頭の新移民と現代の「新移民」の比較考察をすることで、現代の「新移民」の同化が持つ多様性、独自性を明らかにすること、②

さらに、これら「新移民」の第二世代に当たる子どもたちが、現代アメリカ社会に適応し、社会経済的地位を向上させていくためには、いかなる条件が必要とされるかを明らかにすることにある。

## 1. 20世紀初頭の新移民の大量到来

### —アメリカへの移民の「第一の大波」—

#### 新移民の大量到来の衝撃

アメリカの移民史において移民数が頂点に達するのは第一次大戦直前の1913年の198万人で、その前後の1906年から1915年までの10年間におよそ1000万人がアメリカに押し寄せてきている。つまりこの間毎年平均100万人の移民を、アメリカは受け入れていたことになる。これらの移民の大半は、ミシシッピ川の東側、オハイオ川とポトマック川の北側の地域にある鉱工業の中心地に集中して住み着いた。しかし、これらの移民のうちかなりの数が極西部にも広がり、さらには1910年までには、南部ですら20万人の移民をかかえるに至った（Higham 1975 : 43-44）。

移民が受け入れ国に与える衝撃を示す指標としては、その絶対数よりも、それを受け入れる国の人口数に対する割合を重視すべきであろう。このため各5年間の移民数をその最終年の人口数の百分比で示したのが表1のC欄である。これらの統計からだけでも、1850年前半の移民排斥運動、ノーナッシング党の台頭、1882年の最初の移民排斥立法、第1次大戦直前の10年間の移民制限運動などの時代背景を説明する一つの目安になるだろう。

新移民がアメリカ社会に適応しにくいと思われたのは、彼らの多くが中欧、東欧、南欧からの移民であったという民族的な出自にあったことは言うまでもないが、宗教的にみても彼らの宗教が東方正教、ギリシャ正教、ローマ・カトリック、ユダヤ教などといった、北欧や西欧のプロテスタント的文化になじみにくいものであったことも原因している。1880年代から急増の兆しを見せていたドイツ以外の中欧、東欧、南欧からの新移民は、1896年にはついに北欧、西欧からの旧移民を上回った。これらの新移民は、従来の旧移民とは違い、言語、宗教、生活習慣等の面でアングロサクソン系アメリカ人との差異が大きいため、アメリカ社会への適応能力に欠けているように思われた。「西ヨーロッパの規準に従えば、南欧・東欧系移民の大群は、まともに教育を受けていず、社会的に後進的であり、その外貌は異様であった」（Higham 1983 : 65）。そればかりか、ポーランド系がカトリックの、ロシア系が東方正教会の組織を設立したことなどに見られるように、新移民が自民族で固まって文化を保持することにこだわったことは、国内の反移民感情を喚起せずにはおかなかった。西部開拓は1880年代にはほぼ限界に達しつつあり、多くの新移民は都市に留まったが、彼らは都市化とともに発達した集票組織としてのマシーンに取り込まれて利用され、旧移民にとっては政治的にも無視できない存在となっていった。さらに、表2に見ら

れるように彼ら新移民の非識字率が北欧系や西欧系の移民のそれにくらべて格段に高かったことも彼らに対する差別意識を生む一因となったことは間違いないところであろう。

表1 アメリカ合衆国総人口に占める移民の割合 (1821年-1955年)

A		B		C
西 暦	移民人口 (単位1000人)	西 暦	総人口 (単位1000人)	$C = A/B$ $\times 100(\%)$
1951-1955	1,088	1955	165,270	0.66
1946-1950	864	1950	151,683	0.57
1941-1945	171	1945	139,928	0.12
1936-1940	308	1940	132,122	0.23
1931-1935	220	1935	127,362	0.17
1926-1930	1,468	1930	123,188	1.19
1921-1925	2,639	1925	115,832	2.28
1916-1920	1,276	1920	106,466	1.20
1911-1915	4,460	1915	100,549	4.44
1906-1910	4,962	1910	92,407	5.37
1901-1905	3,833	1905	83,820	4.57
1896-1900	1,564	1900	76,094	2.05
1891-1895	2,124	1895	69,580	3.05
1886-1890	2,271	1890	63,056	3.60
1881-1885	2,976	1885	56,658	5.25
1876-1880	1,085	1880	50,252	2.16
1871-1875	1,727	1875	45,073	3.83
1866-1870	1,513	1870	39,905	3.79
1861-1865	802	1865	35,701	2.25
1856-1860	850	1860	31,513	2.70
1851-1855	1,748	1855	27,386	6.38
1846-1850	1,283	1850	23,261	5.52
1841-1845	430	1845	20,182	2.13
1836-1840	347	1840	17,120	2.02
1831-1835	252	1835	15,003	1.68
1826-1830	103	1830	12,901	0.80
1821-1825	41	1825	11,252	0.36

出典：A. *Historical Statistics of the United States: Colonial Times to 1957*, pp.56-57.

B. *Ibid.*, p.7

表2 移民の非識字率（1889年－1910年）

ポルトガル	68.2%	中国	7.0%
トルコ	59.5%	フランス	6.3%
メキシコ人	57.2%	ドイツ	5.2%
南イタリア	53.9%	オランダ、ベルギー	4.4%
小ロシア	53.4%	キューバ以外の西インド	3.2%
シリア	53.3%	アイルランド	2.6%
リトアニア	48.9%	ウェールズ	1.9%
インド	47.2%	ボヘミア、モラヴィア	1.7%
ブルガリア、モンテネグロ、セルヴィア	41.7%	フィンランド	1.3%
ダルマチア、ボスニア、ヘルツェゴビナ	41.0%	イングランド	1.0%
ユダヤ	26.0%	スコットランド	0.7%
日本	24.6%	スカンディナヴィア	0.4%
北イタリア	11.5%		

出典：Statistical Review of Immigration, 1820-1910 (Reports of The Immigration Commission), p.84 より抜粋

## 2. 現代アメリカにおける移民の「第二の大波」

### —1965年の移民法改正と「新移民」の大量到来—

#### 1965年の移民法改正と「新移民」の大波

第二次大戦以後、国際連合を中心として、アメリカを始めとして欧米先進国が国際主義に転じるにつれ、ヨーロッパ系移民（白人）を優遇する人種主義的な移民選抜方法に対する国際世論の批判が高まった。したがって、当時のアメリカが採用していた出身国別割当制度（Quota System）の差別的性格への批判はまぬがれなかった。戦後期の移民政策の基調となった1952年の移民法（マッカラン＝ウォルター法）では、帰化不能外国人という区分を廃止し、アジア諸国にも一定の割当枠を与えたという点で、差別是正の考慮がなされていたが、割当制度の基本的性格に変更はなかった。だが、1960年代になると、開放的移民政策をその著書（Kennedy 1964）で訴えていたアイルランド系移民の第三世代に属する J・F・ケネディが大統領となり、加えて公民権運動によって差別に対する国民の意識が高まったこともあり、本格的な改革は不可避となった。このような状況で制定されたのが、1965年の移民法（ケネディ＝ジョンソン法）である。この法律は、移民受け入れ総数を29万人に設定し、その内訳をヨーロッパ、アジア、アフリカから17万人、南北アメリカ大陸から12万人、一国からの上限を2万人と規定した。

この移民法の改正により大きく変更されたのは、第一に合衆国がアジアからの移民に再び門戸を開放することになった点である。その後大量に流入した勤勉なアジア系移民は、「モデル・マ

イノリティ」として各界で活躍を見せており、アメリカは彼らの多大な貢献により多民族国家の理想を体現しつつあるといえよう。第二の変更点は、カナダとラテンアメリカ諸国からの移民数に初めて上限が設定されたことである。これにより「不法」移民が急増し、とりわけ国境を接するメキシコからの「不法」入国の防止と、ヒスパニックの急増により社会が変質していくことへの危惧が、現代アメリカ社会における最大の課題の一つとなっているのは、周知の通りである。なお、移民の年間受け入れ総数は、1990年の移民法では、70万人に拡大されている。

先述のように1965年の移民法改正は、新しい移民の大波をアメリカ合衆国にもたらした。1924年から1965年に至る時期には、年平均191,000人に過ぎなかった合法移民数は、1966年から1981年の間には年平均435,000人へと急増した。しかもその間に、現在アメリカで政治問題化しているメキシコなどからの「不法」移民の激増があったことを考慮するならば、70年代の移民数は年平均100万を数えた今世紀初頭のピーク（東欧・南欧からの新移民の大波）に匹敵すると考えられる。アメリカ社会における移民のインパクトの増大は、外国生まれ人口の絶対数、とりわけその対総人口比の劇的増加からも推測される。1920年代以降減少の一途を辿ってきた外国生まれ人口は、1970年国勢調査までには、対総人口比4.7パーセントにまで落込んでいる。ところが1980年調査においては、それは6.2パーセントへと増加し、さらに2000年代に入ると、外国生まれ人口は10パーセントを超えている。絶対数で見ても、「新移民」の人口は3,100万人であり、ざっと見積もっても毎年120万人の人々がアメリカに移民として移住してきていることになる。その結果、アメリカ国民の9人に1人が移民であるという驚くべき数字が現実となっている。

### 移民の出身国別民族構成の変化

1965年の移民法改正は、移民の「第二の大波」をもたらしただけでなく、移民の出身国別構成をそれまでのヨーロッパ系白人中心の出身国別民族構成に大きな変化を生み出した。1924年法による「出身国別割当制度」(Quota System)の導入は、世紀転換期以来の東欧・南欧系移民、すなわち当時の新移民の流入に歯止めをかけることを目的とし、実際1920年代以降西北ヨーロッパ系移民の相対的増加という所期の結果がもたらされた。これに対して、1965年移民法は移民受け入れに関し特定地域や国や人種の優遇措置の撤廃を目的とし、70年代には早くもその目的を達したと言える。つまり、これ以後各国間割当ての平等化の原則の下、従来は差別されていたアジア諸国が、中南米諸国と並んで、合衆国移民の主たる送出国となったのである。ドイツ・イギリス・イタリアなどのヨーロッパ諸国がアメリカ移民の主たる送出国であった1950年代とは著しく異なり、2000年の国勢調査の時点では、メキシコ、ジャマイカ、ドミニカ、キューバなどのラティーノないしヒスパニックと呼ばれるラテンアメリカ諸国からの移民が12パーセントを占め、アメリカの総人口で黒人を上回る比率になっている。また、中国（台湾を含む）、フィリピン、インド、韓国、ベトナムなどのアジア系の移民の占める割合も、1980年の国勢調査の時点

では1.54パーセントに過ぎなかったが、2000年の時点では3.6パーセントで、著しい伸びを示している（表3および表4参照）。

表3 アメリカ合衆国国勢調査（1980年、1990年、2000年）による人種別人口

人種	1980年		1990年		2000年	
	人数	%	人数	%	人数	%
総人口	226,545,805	100.00%	248,709,873	100.00%	281,421,906	100.00%
ヒスパニック	14,608,673	6.45%	22,354,059	8.99%	35,305,818	12.55%
白人	180,256,103	79.57%	188,128,296	75.64%	194,552,774	69.13%
黒人	26,104,285	11.52%	29,216,293	11.75%	33,947,837	12.06%
アメリカ先住民	1,417,110	0.63%	1,793,773	0.72%	2,068,883	0.74%
アジア系	3,489,835	1.54%	6,968,359	2.80%	10,123,169	3.60%
ハワイ先住民と太平洋系	—	—	—	—	353,509	0.13%
その他	669,799	0.30%	249,093	0.10%	467,770	0.17%
二つ以上の人種を持つ者	—	—	—	—	4,602,146	1.64%

出典：Census 2000 analyzed by the Social Sciences Data Analysis Network (SSDAN)

注：1980年および1990年の「アジア系」には、ハワイ先住民と太平洋系が含まれている。

表4 アメリカ合衆国国勢調査（2000年）による人種別人口

人種	人数	%
総人口	281,421,906	100.0
白人	211,460,626	75.1
黒人（アフリカン・アメリカン）	34,658,190	12.3
ヒスパニック（ラティーノ）	35,305,818	12.5
アメリカ先住民	2,475,956	0.9
アジア系	10,242,998	3.6
インド系	1,678,765	0.6
中国系	2,432,585	0.9
フィリピン系	1,850,314	0.7
日系	796,700	0.3
韓国系	1,076,872	0.4
ヴェトナム系	1,122,528	0.4
その他	1,061,646	0.4
ハワイ先住民と太平洋系	398,835	0.1
その他	15,359,073	5.5
二つ以上の人種を持つ者	6,826,228	2.4

出典：U.S. Census Bureau, Census 2000



以上見てきたように、現代アメリカに世界中から難民や不法移民をも含む新しい移民の波が押し寄せてきている。これは20世紀初頭の移民の大波に次ぐ移民の「第二のピーク」である。これらの移民群を構成しているのは、主として従来のヨーロッパからの移民とは肌の色も民族的、宗教的、文化的背景も全く異なるラテンアメリカ諸国やアジア諸国からの多様な人種、民族、社会階層からなる人々である。しかしながら、この新しい移民群の中には、大量のメキシコをはじめとする中南米からの「不法」移民が含まれていることも事実である。言うまでもなくこれは20世紀初頭に合衆国が経験した「新移民問題」の再現という様相を帯びた問題であった。そこで、以前の新移民の場合と同じくこの新たな移民群についても、これをアメリカ社会のうちにどのように同化させていくか、あるいはそもそも同化することが可能か否かが、社会学者を中心として広く議論されることとなった (Jacoby 2004)。以下、現代アメリカにおける移民研究の第一人者であるキューバ系アメリカ人の社会学者アレハンドロ・ポルテスの理論に依拠しつつ、「新移民」、とりわけ移民第二世代の同化をめぐる問題を中心に検討する。

### 3. 「新移民」の同化をめぐる実証的研究

#### —ポルテスらの研究を中心に—

##### キューバ革命と若き移民研究者の誕生

アレハンドロ・ポルテスは、30年に及ぶ移民研究で知られる著名な現代アメリカの社会学者であり、現在プリンストン大学の社会学部長であると同時に、彼自らがその創設者の一人である同大学附設の「移住および開発研究センター」所長の職にある。1998年にはアメリカ科学アカデミーの会員となり、1998年から1999年にかけてアメリカ社会学会の会長職を務めている。彼の著書、編著、論文の数は膨大であり、その多くは移民の同化、ラテンアメリカの政治、合衆国とキューバの関係などをめぐっての論稿である<sup>1</sup>。

ポルテスは1944年にキューバの首都ハバナに生まれている。彼は1959年にハバナ大学の学部学生として1年間学んだが、当時のキューバは革命の最中にあり、バチスタ独裁政権が倒され、フィデル・カストロの指導の下に新しい政権が打ち立てられたときに重なっていた。ポルテスはこの政権に反対だったので、1960年にキューバを去り、政治亡命者になり、1963年にブエノス・アイレスのアルゼンチン・カトリック大学で学んだ後、アメリカ合衆国へ渡りネブラスカ州のオマハにあるクレイトン大学で社会学を専攻、1965年に学士号を取得している。彼が社会学を専攻しようと思いついた動機は、キューバ革命における彼自身の経験の意味するものを解明したいというものであった。その後ポルテスは、ウィスコンシン大学の大学院へ進み、チリの都市スラムに

<sup>1</sup> 以後のポルテスの略歴に関する記述は、彼がアメリカ科学アカデミー会員に選出された際の講演をもとにしている (Bundesen 2004:11917-11919)。

における政治的ラディカリズムに関する研究で博士論文をまとめている。

### エスニック・エンクレイヴ論の提起

社会学者としてのポルテスの職業経歴は、きわめて順調かつ輝かしいものであった。大学院を終えてまもなく、イリノイ大学の社会学助教授の仕事につき、そこにもわずか1年だけで、オースチンにあるテキサス大学のテニチャー（長期在職権）つきの準教授のポストを提供されている。テキサス大学時代のポルテスは、1970年代半ばにキューバとメキシコからフロリダとテキサスに次々に到来した移民たちの比較研究を手がけており、これは後にロバート・バックとの共著の形で出版されている（Portes & Bach 1985）。ここでの彼の調査は、約1500名のキューバ人とメキシコ人へのインタビューという手法をとっている。しかもこのインタビューはアメリカへの到来直後と、その3年後および6年後の3回にわたって実施されており、移民たちのアメリカ社会への適応過程を長期間にわたる経時的変化に着目しつつ追跡調査したもので、この調査手法はその後の彼の研究で再び用いられることになる。この研究は、同じくラテンアメリカからの移民でありながら、キューバとメキシコからの移民たちのその後のアメリカ社会への適応過程が、著しく異なる結果へと導かれている事実を明らかにし、二つの移民グループがたどった同化のプロセスを比較考察することによって、そのような異なる結果を生んだ社会経済的要因を明らかにしようとするものであった。

新来の移民たちにとって、同国人のエスニック・コミュニティからのサポートが社会的資本として重要な役割を果たしている事実に着目したポルテスは、この新しい社会構造を「エスニック・エンクレイヴ (ethnic enclave)」と呼ぶことを提唱した。キューバからアメリカへの大量の移民は、そのほとんどがマイアミとその周辺地域に住んでおり、この地でキューバ系住民はある程度自己完結的な経済的諸関係を形成している。マイアミのダウンタウンにあるリトル・ハバナと呼ばれるキューバ系アメリカ人集住地域には、零細な企業や商店、レストラン、医院などが集中している。キューバ人の所有する企業の数は、1967年には919社であったが、1976年には8000社に増え、1990年にはおよそ28,000社にも上っている（Portes & Rumbaut 1996 : 20）。つまり、その内部で、医者や弁護士などの専門家から一般の労働者までがまかなえるようになっているのだ。それは、たとえば言えば一国の内部にキューバの飛び地（エンクレイヴ）が存在しているようなものである。ひとたびエンクレイヴが形成されれば、エスニック・グループの各個人は、外部の労働市場に進出するよりも、エンクレイヴ内の労働市場にとどまるほうが、より高い階層にまで上昇することができる。この点でキューバ系移民は、メキシコ系移民に較べて新しい社会的環境に適応するための有利な条件に恵まれていると言える（Portes & Stepick 1993 : 123-149）。

エスニック・エンクレイヴが成立するためには、次の3つの条件が必要となる。第一に、移民の間に母国で企業や商店を経営するために必要な経験やノウハウを有する起業家（entrepreneur）

が存在すること。ポルテスらは3つの必要条件の中では、これがもっとも重要であると言う。第二に、経済的発展のための新たな機会を創出するために必要な資本（それが海外から持ち込まれたものであれ、アメリカ国内で貯蓄されたものであれ）が十分に存在すること。たとえばキューバ系住民を顧客としたレストランを開設するために必要な最小限の資金がそれにあたる。第三に、その企業で雇用する労働力が存在すること。しかし、労働力の確保はそれほど大きな障害とはならない。なぜなら、商店の経営などの場合は当初は家族経営の形で出発すればよいし、経営規模が拡大するにつれて、次々とキューバからやってくる新来の移民を雇用することができるからである（Ibid. : 21）。

### キューバ難民の研究

ポルテスは1975年には早くもデューク大学の正教授の地位につくが、そこにも4年ただけで、1981年にはバルチモアにある東部名門校ジョンズ・ホプキンス大学の社会学の正教授に就任している。それまで転々と大学をあわただしく移動してきたポルテスであったが、ここジョンズ・ホプキンス大学には16年の長きにわたって腰を落ち着け、移民研究に本格的に打ち込むことになる。この時期にポルテスが取り組んだ移民研究で注目されるのは、1980年のキューバのマリエルから南フロリダへの大量の難民のアメリカ社会への統合に関する研究である。これら難民の数は125,000人にも上るが、彼らの中には多くの犯罪者や精神病患者が含まれていたことが後に判明した。ポルテスと彼の共同研究者は、同時期にハイチから到来した難民とキューバ難民との比較を行うことにより、同じく精神病の患者でありながら、キューバ難民のほうがハイチからの難民より、より効果的な治療を容易に受けることができた原因として、マイアミにあったキューバ人コミュニティからのサポートをあげている。この研究は後にアレックス・ステピックとの共著という形で出版され、1995年に都市社会学の優れた研究書に与えられるアメリカ社会学会（ASA）のロバート・パーク賞を受賞している（Portes & Stepick 1993）。

## 4. 移民第二世代の同化に関する研究

### CILS

以上、見てきたように、初期のポルテスの移民研究は移民の第一世代を中心とするものであったが、やがて彼の研究対象はこれら第一世代の移民の子どもたちの同化をめぐる問題に移っていく。1980年代末にポルテスはミシガン州立大学のランボート（Rubén G. Rumbaut）との共同研究に着手するが、この大規模プロジェクトは、アメリカの移民研究史に残る画期的な成果を生み出すことになる。彼らは「移民子弟の経時的研究」（the Children of Immigrants Longitudinal Study、以後CILSと表記）と名づけられたこの研究において、フロリダ州のマイアミと、カリフォルニ

ア州サン・ディエゴの学校に通学している第8学年と第9学年の5,000名を超える移民の子どもたちを対象に、1992年に最初のインタビューを実施している。77カ国からの移民を親に持つこの子どもたちは、合衆国生まれであるか、少なくとも5年間は合衆国に住んでいることを条件として選ばれている。最初のインタビューの終了後まもなく、この子どもたちの120名（マイアミとサンディエゴで各60名）の親に対する詳細なインタビューが実施されている。この子どもたちは、彼らが高等学校の卒業を目前に控えた3年後の1995年に再度フォローアップ・インタビューを受け、さらにその7年後の青年期を迎えた頃に3回目のインタビューを受けることになる。この研究のねらいは、これらの子どもたちが、アメリカ社会と彼らの親たちの文化とのあいだで引き裂かれた環境の中で成長を遂げていくなかで、彼らにどのような変化が生じたかを明らかにするところにあった（Portes & Rumbaut 2001：22-33）。

### 同化概念の再検討

外国から移民してきたマイノリティが新しい社会的環境と折り合いをつけ、最終的にホスト社会の主流に編入されるという物語は、これまで多くの社会学や経済学の理論によって創りだされてきた。その物語の大部分は楽観的な調子で語られてきたし、ニューカマーたちは最終的にはホスト社会に統合されることを強調するものであった。古い同化（assimilation）の概念では、外国から移民してきたマイノリティとそれを受け入れる側のマジョリティが会うことによって、最終的には社会的に望ましいゴールに到達することが予測されていた。しかしながらポルテスによれば、現実にはそのプロセスはそれほど単純でもなければ、不可避的なものでもない。たとえ同じ国からきた移民たちでも、社会階層、到着の時期、世代などによってしばしば異なった同化のプロセスを辿ることになるからだ。

今日の「新移民」の二世世代のグループの中には、スムーズに主流社会に入っていくことが予定されているものがあり、彼らにとってエスニシティは個人的な選択の問題にすぎない。しかし他方には、自分たちのエスニシティこそが力の源になっており、コミュニティのネットワークや資源を基盤に社会的・経済的に這い上がっていくグループがいることも事実である。さらには、自らのエスニシティが選択の問題でもなければ、前進のための源でもなく、従属の印であるようなグループの存在も否定できない。

### 分節化された同化

以上の理由から、ポルテスは今日の移民を研究するにあたって、同化は依然として基本的概念ではあるが、今日の同化のプロセスはきわめて多くの予測不可能な偶然性や、多くの変数によって影響を受けるため、同化が斉一的で単線的な道を進むということとははやできないと主張している。むしろ彼によれば、今日の移民二世世代は、「分節化された同化（segmented assimilation）」

のプロセスを辿っていると定義することが正しい。分節化された同化という概念はすでにロバート・バックとの共著『ラテン・ジャーニィ』に見られるが (Portes & Bach 1985 : 70)、その後の彼の移民の同化研究の中核的概念として発展を遂げることになる。この分節化された同化においては、移民グループによって結果は異なるし、そこではアメリカの主流に急速に統合され受け入れられるという道は単に可能な選択肢の一つに過ぎない。このような分節化された同化が生じる理由として、ポルテスは次の4つの要因をあげている。①移民の第一世代がどのような歴史を辿ったか。②移民第一世代と第二世代 (すなわち移民家族の親と子どもたち) の同化の速さと規範的統合との関連がいかなるものであるか。③移民第二世代の青少年がホスト社会に適応しようとする際に直面する文化的、経済的障害が存在しているか否か。④移民第二世代の青少年がこれらの障害に直面する際、家族やコミュニティからの支援を受けることが可能か否か (Portes & Rumbaut 2001 : 45-46)。

### 編入の諸形態

ポルテスによれば、今日の移民は、①移民の個人的属性、②移民を受け入れる社会的環境、③移民の家族構造、という3つの根本的な次元において、それぞれ異なった同化のプロセスを辿ることになる。以下、それぞれの次元について簡潔に説明することにしよう (Ibid. : 46-49)。

#### ①移民の個人的属性

第一の次元は移民の個人的属性にかかわるものである。すなわち、移民の年齢、学歴、職業技能、経済的豊かさ、英語力などがあげられる。ポルテスは移民が持ち込むこれらの個人的属性を「人的資本」(human capital)と呼んでいる。この人的資本は移民がホスト社会に適応する際に決定的な役割を果たす。職業技能についても同様のことが言える。

高いレベルの人的資本を有する両親は、次の2つの理由から子どもの適応を支援するためにはより有利な立場にあると言える。第一に、彼らは周囲の環境のもつ機会と陥穽についてより多くの情報を持っている。第二に、彼らはより高い収入を得ることができるため、子どもに戦略的な商品を与えることができる。たとえば、概して劣悪な教育環境にあるインナー・シティに比べてよりよい教育環境に恵まれた郊外に家を持つこと、公立学校に比べて質の高い教育を受けることが可能な私立学校に子どもを通学させること、あるいは家族の絆を強化するために子どもを故国へ旅行させること。これらはいずれもかなりの金銭的負担を親に迫ることになるので、平均的な家族には手が届かないのである。

#### ②移民を受け入れる社会的環境

第二の次元は移民を受け入れる社会的環境である。新来の移民たちがスムーズにホスト社会に

適応できるか否かを定める要因としては、①移民受入国の政府の移民政策が、新来の移民受け入れに積極的なものか、それとも排斥的ないし消極的なものか、②ホスト社会の人々の新来移民に対する受け入れ姿勢が好意的なものか、それとも敵対的なものか、③新来移民の受け皿となるエスニック・コミュニティがすでに存在しているか否か、存在している場合その規模がどの程度のものか、などである。

以下、移民を受け入れる社会的環境について、やや詳しく論じることにして。新来移民（ニューカマー）が直面する第一の要因は受け入れ国政府の移民政策であり、それは次の3つの政策に分類できる。第一は排斥的移民政策であり、移民そのものを排除するか、移民たちを強制的に下積みの不利な存在に追いやるものである。第二は消極的移民政策であり、移民の受け入れを法的には認めるが、政府は彼ら移民のホスト社会への適応を積極的に支援しない。第三は積極的移民受け入れ促進政策であり、政府が特定の移民の流入を促進し、優遇的施策によりその定住を援助する。

とりわけ現在アメリカで政治問題となっているのが、メキシコからの「不法」移民排斥の動きである。この運動の背後にあるイデオロギーは「非妥協的移民排斥主義」（intransigent nativism）と呼ばれるものであり、具体的にはカリフォルニア州住民投票「提案187」に代表される。すなわち、すべて、あるいは、ほとんどの移民の受け入れをやめ、不法移民をできる限り早急に本国へ送り返し、合衆国内にとどまる移民たちに対しては、彼らは劣等な地位を占めることになり、アメリカ市民としての資格が与えられないだろうと通告する。この移民排斥運動の背景には、郊外に居住する中流階層の白人たちが抱いている次のような恐怖があると言われている。すなわち、ラテンアメリカからの移民たちのカリフォルニアへの大量流入が、白人が多数を占めていた同州の人口構成や文化を変えてしまい、同州の白人が少数派に転落してしまうことへの恐れである。ポルテスに言わせると、このイデオロギーの支持者たちは、現在のカリフォルニア州のエスニック状況にのみ目を奪われており、このような大量の移民が同州に流入するにいたった過去の歴史的経緯（たとえばブラセロ計画<sup>2</sup>）に目を向けようとはしない。

次に新来の移民が直面する第二の要因は、ホスト社会の人々の移民受け入れの姿勢であり、それは次の要因によって決まる。つまり移民たちが身体的外見、階級的背景、言語、宗教、などの点において主流社会に似ていれば似ているほど、それだけ彼ら主流社会の移民に対する態度はより好意的となり、移民たちの統合も速まる。ここで特筆すべきは、アメリカにおいては、人種が

<sup>2</sup> 20世紀初頭にアメリカ・メキシコ間が鉄道で結ばれると、多くのメキシコ人が合衆国に向かい、南部や西部諸州で鉄道建設や農業に携わった。特に第一次世界大戦後は労働力不足のために流入は急増した。しかし、後に大恐慌時代を迎えると、失業・政府の帰国奨励策・人種差別などのために、彼らの多くが帰国した。第二次世界大戦が勃発すると、南部の農業労働者を中心に再び労働者不足にみまわれるようになった。そのため合衆国は各国と二国間協定を結んで労働者を受け入れるブラセロ計画を1942年から推し進めた。カリブ海諸国やカナダとも協定を結んだが、受け入れのほとんどはメキシコからの労働者となった。1965年にブラセロ計画は廃止されたが、帰国しない外国人労働者は多く、不法滞在や密入国の問題が深刻と なっていった。

移民の社会的受け入れを左右する主要な基準であり、ときには階級の背景、宗教、言語などの影響を上回ることさえあるという事実である (Warner & Srole 1945 : 288)。「人種による序列」(racial gradient) は合衆国の文化には依然として存在しており、肌の色が黒ければ黒いほど、支配的な集団 (白人社会) からの社会的距離は遠くなり、個人的な技能を生かすことは困難になる。

新来の移民たちを待ち受けている第三の要因は、同国人 (同胞) のエスニック・コミュニティがホスト社会にすでに存在するか否かという点である。ニューカマーたちを受け入れてくれるコミュニティが存在しない場合があるが、そのような場合、彼らニューカマーたちは、自分たち自身でホスト社会へ適応するという困難に直面しなければならない。しかし通常は、同国人のコミュニティがすでに存在しており、そのコミュニティがクッションとなって移民たちになじみのない異文化の衝撃を緩和してくれ、新来者が仕事を探す支援をしてくれる。この他に、住居、買い物、子どもの通う学校、病院など、彼ら新来の移民たちが生活するうえですぐに必要になる情報を、同国人の社会的ネットワーク (エスニック・ネットワーク) を通じて提供してもらうことができる。

エスニック・ネットワークは、移民がホスト社会にうまく適応する妨げになる障害に直面した場合に、次のような重要な資源を提供する。第一にエスニック・ネットワークは、移民の親たちが故国から持ってきた技能 (それがなんであれ) を活用するためのよりよい機会を与えることによって、また時には企業家としての訓練をさらに積ませることによって、彼らの経済的機会を増やす。第二に強固なエスニック・ネットワークは、通常、離婚や婚姻の破綻を妨げる規範を強化することで、健全な家族を保持する。第三にエスニック・ネットワークは、直接親の権威を強化する働きをする。社会的資本は移民の相対的な経済的成功ないし職業での成功に依存するよりは、移民たちの間に見られる絆の強さにむしろ依存している。

### ③家族構造

第三の次元としては移民の家族構造があげられる。移民第二世代の適応にとって重要な意味をもつ第三の次元は、移民家族の構成である。なかでもとりわけ重要なのが、その移民家族に実の親がどれだけ含まれているかである。移民家族がどのような文脈に置かれているかによって、第二世代がその後どのような同化のプロセスを辿るかに影響を与えることが予想される。移民家族の構造としては、実の両親が揃っている核家族、離婚による単親家族 (シングル・マザーないしシングル・ファーザーの世帯)、あるいは三世同居の大家族などが考えられるが、これら家族構造の違いは移民第二世代の同化に重要な役割を果たすことが予想される。たとえば、実の両親が揃っている家族のなかで育った子どもは、よりよい教育環境を与えられ、より大きな経済的資源を利用することができ、より多くの大人からの注目や指導を受けることができるからである。

## 5. 文化変容と親子役割の逆転

ポルテスは、移民が新しい社会に適応しようとする際に直面する最も悲劇的な側面は、親と子どもの役割が逆転してしまうことにあるという。このような現象が生じる原因は、新しい社会環境への適応能力の点では、子どものほうが親のそれよりもはるかに優れているのが普通であり、その結果、家族の中の大事な事柄を決定する際の判断が子どもの知識に依存することになるからである。親子間の役割の逆転（role reversal）は20世紀初頭のヨーロッパからの労働者階級の移民の間でもよく見られたことであつたし、しばしばそれはアメリカへの通常の同化過程の一部をなすものとみなされた。ポルテスによれば、今日のラテンアメリカやアジアからの移民の第二世代も、その意味では同じ物語を繰り返している（Ibid. : 52-53）。

### 文化変容の3類型

移民の家族がホスト社会へ同化していく過程で経る最初の段階は、文化的同化（cultural assimilation）ないし文化変容（acculturation）と呼ばれるプロセスである。すなわち、移民がホスト社会で新しい言語（英語）を習得し、新しい（アメリカ的な）生活様式を身につけていく過程である。先述したように、通常移民第二世代の方が新しい環境への適応力が優れているため、文化変容の速度は親よりも子どものほうが速く、親の文化変容は子どものそれに比べ遅れることが多い。ポルテスは、この文化変容の過程で親子の役割が逆転する現象はどの移民グループにも見られるが、それは決して普遍的なものではなく、親の人的資本（とりわけ教育程度）の違い、家族構造、エスニック・コミュニティからの支援などの変数の影響で、いくつかのパターンに分かれるという。彼は先述のCILS調査の結果を基に、移民家族の文化変容を3つの類型に分類している（図1参照）。

文化変容の第一の類型である親子不一致型文化変容（dissonant acculturation）が生じるのは、移民家族の子どもが親より先に英語やアメリカ的生活様式を習得し、それと同時に移民文化を喪失した場合である。この型の文化変容は移民家族の親子役割の逆転につながる。

第二の類型である親子一致型文化変容（consonant acculturation）は、親子不一致型文化変容とは反対に、移民家族が英語とアメリカ的生活様式を習得し、母国語と故国の文化を徐々に捨て去るプロセスが、世代間で同じ速度で生じる場合である。この型の文化変容は最もよく見られる状況である。

第三の選別型文化変容（selective acculturation）は、移民家族の親子が共に十分な規模と多様な制度を有する同国人のエスニック・コミュニティにしっかりと組み込まれており、そのコミュニティが移民家族の文化的転換を減速し、両親の故国の言語と規範の一部を保持することを助長す



図1 文化変容の型

子どもがアメリカ文化と英語を習得	親がアメリカ文化と英語を習得	子どものエスニック・コミュニティへの組入れ	親のエスニック・コミュニティへの組入れ	文化変容の型	予測される結果
-	-	+	+	文化変容への親子一致型抵抗	エスニック・コミュニティでの家族の孤立
+	+	-	-	親子一致型文化変容	家族の統合と社会の主流への受容
+	-	-	+	親子不一致型文化変容 (I)	家族の絆の崩壊と子どももエスニック・コミュニティ放棄
+	-	-	-	親子不一致型文化変容 (II)	親の権威の喪失と親子役割の逆転
+	+	+	+	選別型文化変容	親の言語およびエスニック・コミュニティの資源の保持

出典：Portes & Rumbaut, 1996:242.

る場合に生じる。この第三の型の選別型文化変容においては、世代間葛藤が相対的に欠如し、子どもたちの友人に同じエスニック・グループの友人が多く存在し、第二世代が完全なバイリンガル、バイカルチャーになる可能性が高い（Portes & Rumbaut 1996 : 239-247）。

## 6. 移民第二世代の若者たちの適応をめぐる困難な課題

ポルテスが繰り返し指摘するように、今日の歴史的な文脈のなかでは、20世紀初頭の新移民が直面した困難と共通する問題と同時に、現代の「新移民」に特有の問題が存在する。今日の移民の子どもたちが直面する課題には次の3つの主要な困難な問題がある。①今日の合衆国には人種差別が依然として根強く存続していること。②今日の合衆国の労働市場が二極分化した結果、経済的不平等が拡大していること。③インナー・シティの周辺化した人口が固定してしまっていること。これらの問題について、次に考察しよう。

### ①人種差別の存在

今日の移民の子どもたちは、大多数が非白人である。具体的には彼らはアジア系移民、西インド諸島およびアフリカからの黒人、ラテンアメリカからの黒人、ムラトリー、混血等の移民の子どもたちである。これら有色人種の子どもたちの場合、白人と身体的特徴を異にしており、しかもその特徴は消滅することがないため、かつての東欧や南欧からの白人移民の子どもと違って、そのエスニシティを容易に解消することはできない。肌の色の違いによる差別、とりわけ黒人に対する差別は依然としてなくなっていないため、有色人種の子どもたちの職業上の移動（昇進）や社会的受容の障害となっている。

### ②労働市場の二極分化

サスキア・サッセンがその優れた分析によって明らかにしたように、合衆国の労働市場の構造は、1960年代に始まりその後加速した技術革新と海外の工業製品との競争という2つの要因の影響を被って、変化を遂げ始めた。かかる事態に対処すべく、多くの企業は労働コストを削減するために、生産施設を海外に移転させた。これがいわゆる「産業の空洞化」を招くことになったことは周知の事実である。この結果、産業構造の再編成（リストラ）と企業規模の縮小（ダウンサイジング）によって、かつてヨーロッパからの移民の第二世代が経済的に上昇を遂げるための基盤を提供していたブルーカラーの仕事が次第に消滅していったのである（Sassen 1988）。

現在のアメリカ合衆国におけるサービス部門の雇用は二極分化している。すなわち、一方における熟練を必要としない低賃金の仕事、そして他方における高度の技術と専門的な技能を必要とする職種の急速な増加である。この結果、上層部分の労働者と下層労働者の年収の格差は大きく

なる一方であり、経済的不平等は広がっている。いまや1990年代末の経済的拡大によって広まった「みんなが豊かになっている」という幸福なイメージは現実にそぐわないものになっている。したがって、今日の移民の二世世代が社会的、経済的な成功を収めるためには、ヨーロッパからの移民の子孫たちが数世代かかって達成した教育における格差を数年のうちに超えなければならない。

### ③インナー・シティの下位文化（対抗文化）

移民の子どもたちが直面する第三の困難は、彼らがアメリカの学校や近隣社会で会うことになる下位文化（サブカルチャー）であり、それによって学校からドロップアウトしたり、若者のギャングの一員になったり、麻薬文化に染まったりするという好ましくない結果が彼らを待ち受けている。親たちの中には、このようなアメリカのサブカルチャーの影響を受けることを恐れて、彼らの子どもを故国に帰して、祖父や祖母の元で教育を受けさせる者がいる（Portes & Rumbaut 2001 : 61）。アメリカにおける移民の子どもたちは、新しい生活様式や、メディアが煽り立てる消費願望、さらには受け入れ社会の同輩集団からの影響に絶えずさらされ続けることで、親の子どもに対する規範的な統制力はたちまち弱まってしまう。孤立した家族がこのような状況に置かれれば、簡単に親子不一致型文化変容と役割の逆転というパターンに移行してしまうことが予想される。ポルテスはこのような好ましくない同化パターンを「下降同化」（downward assimilation）と名づけている。なぜなら、このような新しい対抗文化を身につけ、アメリカの社会的サークルに加わることは、上昇移動につながるどころかその反対の結果をもたらすからである（Ibid. : 59）。

アメリカのインナー・シティにおいてこのような逸脱的ライフスタイルが出現するにいたった主たる原因は、前述したようにアメリカの労働市場が変化を遂げたことで、初期の移民の子どもたちの上昇移動を手助けしていたブルーカラーの仕事を、今日の移民の子どもたちから奪ってしまったことにある。この労働市場二極分化の最初の犠牲者は南部の黒人たち、メキシコ系の人々、プエルトリコ人といったマイノリティの子どもや孫たちであったことは言うまでもない（Wilson 1987）。

以上の議論を踏まえて、ポルテスは次のような「分節化された同化のモデル」を提示している（図2参照）。

図2 分節化された同化のモデル

第一世代		第二世代			予期される結果
背景の諸要因	文化変容の型	人種差別	外在的な障害	インナー・シティのサブカルチャー	
親の人的資本	親子不一致型文化変容	差別に直面しサポートも得られない	二極分化した労働市場 個人の資源のみで対処	敵対的な態度やライフスタイルに対抗するメッセージが不在	下降同化
	親子一致型文化変容	差別に直面するが家族のサポートがある	親のガイダンスや家族の資源を受けられる	家族の向上意欲に基づく対抗的なメッセージが存在	多くは上昇同化、時に差別によって妨げられることあり
家族構造	選別型文化変容	エスニック・ネットワークのフィリタターを通して差別を経験し、家族とエスニック・コミュニティのサポートがある	家族とエスニック・コミュニティに後押しされ親のガイダンスを受けられる	家族の向上意欲とコミュニティ・ネットワークに基づいた対抗的メッセージが存在	バイカルチュラリズムと結びついた上昇同化

出典：Portes and Rumbaut 2001: 63.

## 結びにかえて

これまで見てきたところから明らかなように、ポルテスの研究が高い評価に値するのは、現代アメリカの移民の同化のプロセスが、20世紀初頭の東欧・南欧などからの新移民がたどった単線的なプロセスとは異なり、多様な変数により複雑に分節化されていることを、膨大な実証的調査研究によって明らかにした点にある。本稿のねらいは、現代の「新移民」の第一世代の同化のプロセスを明らかにするとともに、移民第二世代の同化に関するポルテスらの実証的な研究成果を踏まえることによって、彼ら第二世代がホスト社会にうまく適応し、社会的梯子を順調に上って行き、自らの社会経済的地位を向上させることに成功するためには、どのような条件が必要かを明らかにすることにあつた。現在ヨーロッパで深刻化している問題（最近のイギリスでのテロ、フランスでの暴動）は、移民の第二世代が将来に希望が持てない絶望的な状況に追い込まれているところから発生していると考えられる。目を国内に転じると、わが国のニューカマーと呼ばれる日系人労働者の第二世代は、果たして将来に希望が持てる状況にあるといえるだろうか。彼ら移民第二世代のなかからホスト社会で成功するものが出てくるか否かは、わが国の移民受け入れ政策をはじめとする取り組みにかかっていると見える。この意味で、ポルテスの移民研究の成果からわれわれが学ぶものは少なくないと思う。

### 参考文献

- Bundesen, Liza Q. 2004. Inaugural Article: Biography of Alejandro Portes, *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America*, August 17, vol. 101, no. 33.
- Foner, Nancy, Rubén G. Rumbaut, and Steven J. Gold, eds. 2000. *Immigration Research for a New Century: Multidisciplinary Perspectives*, Russell Sage Foundation.
- Higham, John. 1975. *Send These to Me: Jews and Other Immigrants in Urban America*, Atheneum. (ジョン・ハイアム著／斎藤眞・阿部齋・古矢旬訳『自由の女神のもとへ—移民とエスニシティ—』平凡社、1994年)
- Higham, John. 1983. *Strangers in the Land: Patterns of American Nativism, 1860-1925*, Rutgers University Press.
- Jacoby, Tamar, ed. 2004. *Reinventing the Melting Pot: The New Immigrants and What It Means to be American*, Basic Books.
- Kennedy, John F. 1964. *A Nation of Immigrants*, Harper & Row Publisher.
- Portes, Alejandro, and Robert L. Bach. 1985. *Latin Journey: Cuban and Mexican immigrants in the United States*, University of California Press.
- Portes, Alejandro, ed. 1993. *The New Second Generation*, Russell Sage Foundation.
- Portes, Alejandro, and Rubén G. Rumbaut. 1996. *Immigrant America: A Portrait*. 2d ed. University of California Press.
- Portes, Alejandro, and Rubén G. Rumbaut. 2001. *Legacies: The Stories of the Immigrant Second Generation*, University of California Press.
- Portes, Alejandro, and A. Stepick. 1993. *City on the Edge: The Transformation of Miami*, University of California Press.
- Rumbaut, Rubén G., and Alejandro Portes, eds. 2001. *Ethnicities: Children of Immigrants in America*, University of

California Press.

Sassen, Saskia. 1988. *The Mobility of Labor and Capital: A Study in International Investment and Labor Flow*, Cambridge University Press. (サスキア・サッセン著／森田桐郎ほか訳『労働と資本の国際移動—世界都市と移民労働者—』岩波書店、1992年)

Warner, Loyd, and Leo Srole. 1944. *The Social Systems of American Ethnic Groups*, Yale University Press.

Wilson, William J. 1987. *The Truly Disadvantaged: The Inner City, the Underclass, and Public Policy*, University of Chicago Press. (ウィリアム・J・ウイルソン著／青木秀男監訳、平川茂・牛草英晴訳『アメリカのアンダークラス—本当に不利な立場に置かれた人々—』明石書店、1999年)